

海の命

立松 和平 作
伊勢 英子 絵

光村図書

1

父もその父も、その先ずっと顔も知らない父親たちが住んでいた海に、太一もまた住んでいた。季節や時間の流れとともに変わる海のどんな表情でも、太一は好きだった。

「ぼくは漁師になる。おとうといっしょに海に出るんだ。」

子どものころから、太一はこう言ってはばからなかった。

2

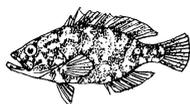
父はもぐり漁師だった。潮の流れが速くて、だれにももぐれない瀬せに、たった一人でもぐっては、岩かげにひそむクエをついてきた。ニメートルもある大物をしとめても、父はじまんすることもなく言うのだった。

「海のめぐみだからなあ。」

5

クエ

岩かげにひそみ、小魚やイカなどを食べる茶褐色かっの魚。本州の中部より南の海にいる。



3

不漁の日が十日間続いて、父は少しも変わらなかった。

4

ある日、父は、夕方になっても帰らなかった。空っぽの父の船が瀬で見つかり、仲間の漁師が引き潮を待ってもぐってみると、父はロープを体に巻いたまま、水中でこときれていた。ロープのもう一方の先には、光る緑色の目をしたクエがいたという。

5

父のもりを体につきさした瀬の主は、何人がかりで引こうと全く動かない。まるで岩のような魚だ。結局ロープを切るしか方法はなかったのだった。

6

中学校を卒業する年の夏、太一は与吉よきちいさに弟子でしにしてくれるようたのみに行った。与吉いさは、太一の父が死んだ瀬に、毎日一本づりに行っている漁師だった。

「わしも年じゃ。ずいぶん魚をとってきたが、もう魚を海に自然に遊ばせてやりたくなっとる。」

「年を取ったのなら、ぼくをつえの代わりに使ってくれ。」

7

こうして太一は、無理やり与吉いさの弟子になったのだ。

8

与吉いさは瀬に着くや、小イワシをつり針にかけて水に投げる。それから、ゆっくりと糸をたぐっていくと、ぬれた金色の光をはね返して、五十センチもあるタイが上がってきた。バタバタ、バタバタと、タイが暴れて尾おで甲板かんを打つ音が、船全体を共鳴させている。

9

太一は、なかなかつり糸をにぎらせてもらえなかった。つり針にえさを付け、上がってきた魚からつり針を外す仕事ばかりだ。つりをしながら、与吉いさは独り言のように語ってくれた。

「千びきに一びきでいいんだ。千びきいるうち一びきをつれば、ずっとこの海で生きていけるよ。」



つり針はり

10

与吉じいさは、毎日タイを二十ぴきとると、もう道具を片づけた。

11

季節によって、タイがイサキになったりブリになったりした。

12

弟子になって何年もたったある朝、いつものように同じ瀬に漁に出た太一向かって、与吉じいさはふっと声をもらした。そのころには、与吉じいさは船に乗ってこそきたが、作業はほとんど太一がやるようになっていた。

「自分では気づかないだろうが、おまえは村一番の漁師だよ。太一、ここはおまえの海だ。」

13

船に乗らなくなった与吉じいさの家に、太一は漁から帰ると、毎日魚を届けに行った。真夏のある日、与吉じいさは暑いのに、毛布をのどまでかけてねむっていた。太一は全てをさとった。

「海に帰りましたか。与吉じいさ、心から感謝しております。おかげさまでぼくも海で生きられます。」

14

悲しみがふき上がってきたが、今の太一は自然な気持ちで、顔の前に両手を合

わせることができた。父がそうであったように、与吉じいさも海に帰っていったのだ。

イサキ

緑色を帯びた褐色の魚。幼魚には、黄褐色の縦じまが数本ある。



ブリ

背中が暗い青色、腹は銀白色で、中央に一本の筋が入っている魚。



15 ある日、母はこんなふうに言うのだった。

「おまえが、おとうの死んだ瀬にもぐると、いつ言いだすかと思うと、私はおそろしくて夜もねむれないよ。おまえの心の中が見えるよううで。」

16 太一は、あらしさえもはね返す屈強な若者になっていたのだ。太一は、そのたくましい背中に、母の悲しみさえも背負おうとしていたのである。

17 母が毎日見ている海は、いつしか太一にとっては自由な世界になっていた。

18 いつもの一本づりで二十ぴきのイサキをはやばやとった太一は、父が死んだ辺りの瀬に船を進めた。

19 いかりを下ろし、海に飛びこんだ。はだに水の感触がこちよい。海中に棒になって差しこんだ光が、波の動きにつれ、かがやきながら交差する。耳には何も聞こえなかったが、太一は壮大な音楽を聞いているような気分になった。とうとう、父の海にやって来たのだ。

20

太一が瀬にもぐり続けて、ほぼ一年が過ぎた。父を最後にもぐり漁師がいなくなったので、アワビもサザエもウニもたくさんいた。激しい潮の流れに守られるようにして生きている、二十キロぐらいのクエも見かけた。だが、太一は興味をもてなかった。

5

21

追い求めているうちに、不意に夢は実現するものだ。

22

太一は海草のゆれる穴のおくに、青い宝石の目を見た。

10

23

海底の砂にもりをさして場所を見失わないようにしてから、太一は銀色にゆれる水面にうかんでいった。息を吸ってもどると、同じ所に同



24

じ青い目がある。ひとみは黒いしんじゆのようだった。刃物はのような歯が並んだ灰色のくちびるは、ふくらんでいて大きい。魚がえらを動かすたび、水が動くのが分かった。岩そのものが魚のようだった。全体は見えないのだが、百五十キロはゆうにこえているだろう。

5

興奮フしながら、太一は冷静だった。これが自分の追い求めてきたまぼろしの魚、村一番のもぐり漁師だった父を破った瀬の主なのかもしれない。太一は鼻づらに

10

興奮フ

灰色は

向かってもりをつき出すのだが、クエは動こうとはしない。そうしたままで時間が過ぎた。太一は永遠にここにいられるような気さえした。しかし、息が苦しくなって、またうかんでいく。

25 もう一度もどってきても、瀬の主は全く動こうとはせずに太一を見ていた。おだやかな目だった。この大魚は自分に殺されたがっているのだと、太一は思ったほどだった。これまで数限りなく魚を殺してきたのだが、こんな感情になったのは初めてだ。この魚をとらなければ、本当の一人前の漁師にはなれないのだと、太一は泣きそうになりながら思う。

26 水の中で太一はふっとほほえみ、口から銀のあぶくを出した。もりの刃先を足の方にどけ、クエ

に向かってもう一度えがおを作った。

27 「おとう、ここにおられたのですか。また会いに来ますから。」
こう思うことによって、太一は瀬の主を殺さないで済んだのだ。大魚はこの海の命だと思えた。

28 やがて、太一は村のむすめとけっこんし、子どもを四人育てた。男と女と二人ずつで、みんな元気でやさしい子どもたちだった。母は、おだやかで満ち足りた、美しいおばあさんになった。

29 太一は村一番の漁師であり続けた。千びきに一びきしかとらないのだから、海の命は全く変わらない。巨大なクエを岩の穴で見かけたのにもりを打たなかったことは、もちろん太一は生涯だれにも話さなかった。



済む

立松和平

一九四七〜二〇一

〇年。栃木県生まれ。作家。児童向けに「山のいのち」「街のいのち」などの作品がある。



見通しをもとう

登場人物の関係をとらえ、人物の生き方について話し合おう

- 人物どうしの関わりや、人物の生き方が表れている表現に着目しよう。
- 人物の生き方について、自分の考えをまとめ、友達と話し合おう。

とらえよう

- 「海の命」を読み、構成と内容を確認めよう。
- いくつの場面に分けられるか。
- 「太一」の他に、どんな人物が出てくるか。それらの人物は、「太一」の成長にどう関わっているか。
- どんな出来事が起こり、どのような結末となるか。

1

5

ふかめよう

- 「瀬の主」は、「太一」にとってどのような存在だろう。「太一」と他の人物との関わりから、考えてみよう。
- 「この魚をとらなければ、本当の一人前の漁師にはなれないのだと、太一は泣きそうになりながら思う。」(228ページ10行目)とある。
- 「太一」の考える「本当の一人前の漁師」とは、どう

10

まとめよう

- この物語には、「海の命」という題名がつけられている。「太一」や他の人物にとって、「海の命」とは何だろうか。
- それぞれの人物の生き方について考えてみよう。そして、それに対する自分の考えをまとめよう。

2

5

ひろげよう

- 人物の生き方について考えたことを、グループで話し合おう。そして、友達の見方にふれて、よく分かったことや、自分の考えが変わったことを伝え合おう。

3

10

- 1 人物どうしの関わりをとらえるとき
「太一」と周囲の人物たちとの関係をとらえるには、人物の行動や会話、情景などから考えるとよい。
例えば、次の言葉は、だが、どの場面で言い、それを「太一」がどのように受け止めたのかを考えることで、「太一」とその人物の関わりが見えてくる。
・「海のめぐみだからなあ。」(218ページ9行目)
・「千びきに一びきでいいんだ。——ずっとこの海で生きていけるよ。」(221ページ13行目)
・「おまえが、おとうの死んだ瀬にもぐると、——おまえの心の中が見えるようで。」(224ページ2行目)
- 2 人物の生き方を考えるとき
次のことに気をつけて、人物の生き方をまとめよう。
・ 人物の行動や会話、様子などを表す複数の表現を関連

10

5

- 3 グループで話し合うとき
づけて、その人物のものの見方や考え方を想像する。
・ 一つの事に対する、別の人物の見方・考え方と比べると、その人物らしさがはつきりする。

私は、なぜ「父」が、巨大なクエに向かったのか疑問に思い、「父」の生き方について考えてみました。——

ぼくは、「太一」がクエに母を打たなかったことに、「父」の生き方とのちがいが表れていると思います。——



ふりかえろう

- 知る 人物どうしの関わりや、人物の生き方を、どのような表現に着目して考えましたか。
- 読む 人物の生き方について話し合うことで、どんな読み方に出会うことができましたか。
- つなぐ 人物の、ものの見方や考え方をとらえるときには、どんなことに気をつけるとよいですか。